

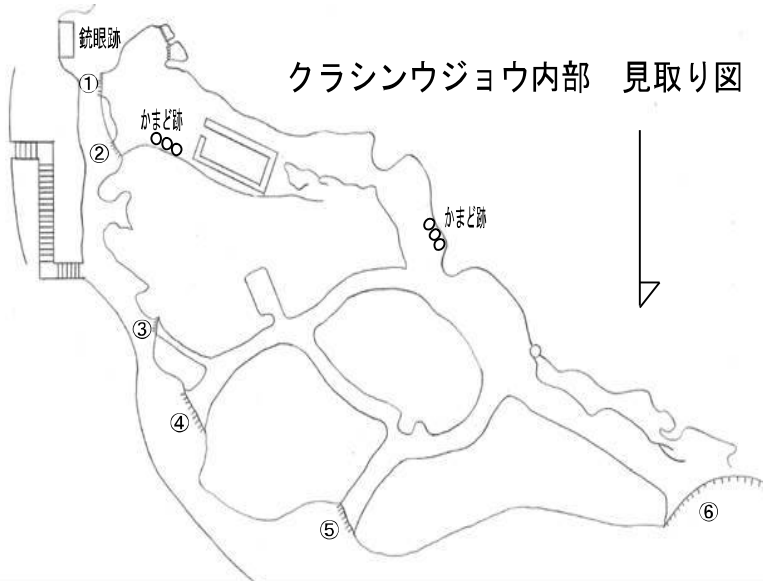
クラシンウジョウ事前学習用資料

「太平洋戦争と沖縄戦」

1941年12月8日、日本軍の真珠湾攻撃を皮切りに、太平洋戦争の火ぶたが切られて落とされた。当初は優勢の日本軍だったが、連合軍との物量の差は大きく、徐々に劣勢となってゆく。1944年夏には「サイパン」「テニアン」「グアム」などの太平洋の島々を米軍により占領され、1945年4月1日に沖縄本島へ上陸を開始した。

日本軍は、沖縄を本土決戦の時間を稼ぐための「捨て石」として作戦を決行する。

結果、日本で最大規模の地上戦となった沖縄戦では、「鉄の暴雨」と呼ばれる程の砲弾や銃弾が飛び交い、多くの地域住民を含む20～24万人が戦死した。



「クラシンウジョウ とは」

琉球石灰岩でできた天然洞窟。

クラシンウジョウとは「暗御門」と書き、暗いあの世の門、洞窟の墓という意味があり、戦前は「世ぬ主（ゆぬぬし）ガマ」と呼ばれ、琉球王尚巴志（しょうはし）の三男であった具志頭按司（ぐしかみあじ）のお墓があった場所であると伝えられている。開口部③～⑤に通じる細い通路が人工的に掘られた部分である。



港川を望む 「銃眼」

「クラシンウジョウと沖縄戦」

具志頭村（現八重瀬町）南側の港川という集落が米軍上陸地点として予想されていたため、

1944年の夏頃に日本軍がクラシンウジョウを接收し、人工的に掘り進め、自然壕に人工壕を継ぎ足して、陣地壕として構築された。

開口部①外側には、港川を望む「銃眼」が設置され、米軍の動きを監視していたものと考えられている。しかし戦力の差はあまりにも大きく、多くの米軍艦隊に向かって、1発の銃弾も発射されることは無かったという。



「沖縄戦当時のクラシンウジョウ」

日本軍のみで使用されたと言われており、一時は火薬庫として使用され、内部では照明用のロウソクすら灯すことが出来ず、そのため内部は非常に暗く、ロープを伝って内部を行き来していたとされる。また、クラシンウジョウを民間人が使用した記録はなく、ここでの戦死者は出ていないと伝えられている。

NPO法人 自然体験学校 作成